

社会科学系学部の学びの質向上に寄与する 図書館の新たな学習支援プログラムの開発

— BKC 社会科学系学部(経済学部・経営学部)のゼミナール大会に注目して —

栗谷 伊澄 (図書館サービス課)

本村 廣司 (大学行政研究・研修
センター専任研究員)

武山 精志 (図書館次長)

臼井 文子 (図書館サービス課長)

要 旨

学びの質転換に向け、大学図書館では新たな役割や機能が求められている。本研究では、学びの質向上は信頼性の高い学術情報を使うことと切り離せない関係にあることから、BKC 経済学部、経営学部のゼミナール大会における新たな学習支援プログラムを開発した。ゼミナール大会は、両学部において、学びの基礎力を鍛え成果を確認する一大イベントであり、参加学生の授業外学習の動機付けとなっており、図書館にとっても多くの学生に対して支援を集中して行える利点がある。

他大学学習支援や学生アンケート、教員ヒアリング等の調査の結果、ゼミナール大会で身につけるべき力のうち問題発見能力と調査能力の基礎を身につけ、定着させるための支援プログラムを立案した。この支援プログラムは、図書館における学部の学びにコミットした新たな学習支援への取り組みであり、新しい図書館のモデルと図書館職員像創造につながるものである。

キーワード

学びの質向上、学習支援、大学図書館、ゼミナール大会、授業外学習

I. 研究の背景

1. はじめに—大学図書館に求められる役割・機能の変化

中央教育審議会答申『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』では、「答えのない問題に最善解を導くことができる能力」の育成が大学教育の大きな目標とされた。同答申では、主体的な学習経験を積むためには、十分な質を伴った授業時間外学習時間の増加が重要であり、学習支援環境として「学びのベースとなる図書館の機能強化」が必要とされた。また、学術情報基盤の急速な進展による環境変化を受け、科学技術・学術審議会『大学図書館の整備について—変革する大学にあって求められる大学図書館像—』では、「学士力」育成に向け、大学図書館は新たに「学習支援

及び教育活動への直接の関与」に取り組み、より利用者
に近接したサービスを提供することが必要とされており、大学図書館に求められる機能や役割も変わりつつある^{注1)}。

2. 立命館大学図書館における学習支援—ラーニング モモンズ「びあら」への展開

大学図書館の教育・学習支援は、従来、職員による学術情報検索方法等の図書館リテラシー教育とレファレンスサービスが主であったが、学術情報の電子化やデジタル・ネイティブ世代の到来など外的環境の変化により、新たなサービスの必要性やニーズの変化をもたらした。北米の図書館をモデルとしたラーニングモモンズの整備が2007年頃より国内でも始まり、近年ではその「場」

を利用した新たな学習支援の展開がされている^{注2)}。

本学図書館においても、学生の滞在型学習に対するニーズや学習スタイルの変化に対し、学びのコミュニティ作りと学習者中心の教育の推進に向けた全学的な図書館政策としてラーニングコモンズのあり方や学習支援の必要性について検討され、ラーニングコモンズ「ピア・ラーニングルーム」（呼称びあら）が2011年に衣笠図書館、2012年にBKCキャンパスのメディアセンターとメディアライブラリーに開設された^{注3)}。

「びあら」は、開放的な空間で複数人が相談や議論をしながら学ぶことができる学習の「場」と、空間を活かした学習支援により、本学の強みである学生同士の学びあいであるピア・ラーニングを進め、主体的・自立的な学習者の育成を目指している。

「びあら」の学習支援は、教学部などとの連携のもと、学術情報検索支援、IT支援、ライティング支援、基礎力養成支援が提供されている（表1）。特に、BKCメディアセンターの基礎力養成支援は、課題や講義でわからなかったことに対する学習支援としてよく利用されており、図書館内の資料を「びあら」内に持ち込み学習している学生も多く、学び合いの「場」と学習支援と図書館資料との相乗効果がみられる。学生が集まり学習する場所である図書館において、低回生を主な対象者とする新たな学習支援を開始したことは、より多くの学生が学習支援を知り、利用する機会を生み出した。

3. 学びの質にかかわる問題

(1) 学術情報への適切な活用

今や多くの学生がPCを保有し、検索エンジンによる情報検索に慣れた「デジタル・ネイティブ世代」である。本学図書館では、このような学生の変化と学術情報の急速な電子化の展開に対応し、データベースや電子ジャーナルなど電子資料の充実と、大学での学びに必要な学術情報活用に向けた図書館リテラシーの強化に取り組んで

きた。全学部1回生対象の図書館リテラシー教育に加え、専門分野の学術情報検索能力向上を目的としたゼミ・クラス対象で行う出張ガイダンス、個人申込制ガイダンスや自学自習ツール e-Learning「RAIL」の提供など、必要な時にいつでもスキルアップすることができる機会を整備している。

一方、学生はインターネット上の検索エンジンによる情報を主に利用して、レポートや論文執筆をしており、剽窃も多いとの声が教員よりある。実際に学生の図書館所蔵の電子資料の利用は少なく、積極的に利用できていないと考えられる。東京大学教育学部比較教育社会学コースと Benesse 教育研究開発センターによる共同研究『社会科学分野の大学生に関する調査報告書』では、多くの学生がレポートに収集した情報をそのまま書き写していることが明らかになり、学術情報の的確な活用と引用ができていないことが課題とされた^{注4)}。

(2) 学生の学習時間と学びの主体性

前掲の中教審答申（2012年6月）では、大学での「学びの転換」のためには、十分な質を伴った授業時間外の事前・事後の学習時間の増加が必要とされた。独立行政法人日本学生支援機構『2010年度学生生活調査結果』によると、1週間の授業に関わる予習・復習時間は、国立大学生8.26時間、私立大学生6.29時間、平均6.23時間であり、大学設置基準に示されている単位取得に必要な学習時間に達していない。本学の『第1回学びの実態調査』において、「授業の予習をする」「授業の復習をする」との設問に、「全くあてはまらない」「あてはまらない」と回答した学生が約7割おり、同様な状況である^{注5)}。

授業に関する学習時間の少なさは、全国的に社会科学系学部において特に深刻である。東京大学の大学経営・政策研究センター『全国大学調査』によると、1週間の授業に関する学習時間は他分野と比べ社会科学系分野の学生が相対的に少なく、1週間に0時間の学生が約2割、

表1 「びあら」での学習支援

| 支援名称 | 支援スタッフ | 内容 | 実施館 |
|----------|------------|------------------|---------------------------|
| IT支援 | レインボースタッフ | 表計算・Word等の利用支援等 | 衣笠図書館 |
| 学術情報検索支援 | ライブラリースタッフ | 情報検索支援、「びあら」利用支援 | 衣笠図書館、メディアセンター、メディアライブラリー |
| ライティング支援 | 大学院生 | 日本語ライティングサポート | 同上 |
| 基礎力養成支援 | 学生・大学院生・教員 | 数学・物理・化学・生物の学習支援 | メディアセンター |

※レインボースタッフとライブラリースタッフはいずれも学生スタッフ。

5時間以下の学生も8割近い状況にある。前掲『2010年度学生生活調査結果』では、1週間の授業以外の学習時間は、国立大生8.04時間、私立大生5.02時間である。

さらに、Benesse教育研究開発センター『大学生の学習・生活実態調査』では、「授業でわからなかったことは、自分で調べる」「授業に興味を持ったことについて主体的に勉強する」について、社会科学系の数値は「とてもあてはまる」61.5%「まああてはまる」60.4%であり、全国平均値である「とてもあてはまる」66.0%、「まああてはまる」61.7%に比べると低く、主体的に学習に取り組むことができている状況がうかがえる。

文部科学省『平成22年度学校基本調査』によれば、私立大学において社会科学系学部のしめる割合は全体の39.7%と高く、本学でも同様に社会科学系学部の学生が最も多い。本学の社会科学系学部学生の学習時間を増やし、学びの質を向上させる取り組みについて、図書館も環境整備や学習支援などに取り組む必要がある。

4. ゼミナール大会への学習支援

(1) ゼミナール大会の位置づけや概要

本学において、正課外の活動として多くの学部で開催されているゼミナール大会は、経済学部と経営学部においては長い歴史を有し、両学部における一大イベントである（表2）。1回生には基礎演習で学んだことを実践し確認する機会であり、卒業研究や卒業論文を必修としていない両学部の3回生での参加は学びの集大成としての意味もあわせもつ。

ゼミナール大会は、論文と分科会プレゼンテーション発表で競われ、教員が審査員をつとめる。基礎演習やゼミぐるみで参加することも多く、準備も基礎演習やゼミ

の時間の一部を使用しているため、参加学生にとって、ゼミナール大会は自主的に学びに取り組まざるをえない状況になり、学びに対する動機づけとなっているといえる。

(2) 図書館におけるゼミナール大会支援

経済学部、経営学部長が主に利用するBKCメディアライブラリーでは、ゼミナール大会の準備が本格的にはじまる10月ごろより、例年入館者数や貸出冊数が増加する傾向にある（図1、図2）。ゼミナール大会の準備期間は、テーマに関連した図書館資料に対する購入希望や情報収集方法や資料の問い合わせも多く寄せられ、グループで作業をするためにグループ学習室の利用が増加しており、学生の図書館利用が活発化している。

また、ゼミナール大会に関わる学生からのニーズとして、たびたび前年度の論文などを閲覧したいとの問い合わせが図書館カウンターに寄せられている。しかし、図書館においてゼミナール大会に沿った学習支援やサービスは行っていない。

図書館にとってゼミナール大会は、学生に対し1回生前期の図書館リテラシーで得た知識を積極的に活用することで、定着させる機会でもある。図書館では、前述した個人申込制ガイダンスや「RAIL」などを準備しているが、利用はあまり多くない。クラス対象出張ガイダンスは、クラス毎に教員がキーワードや内容を決めて申し込むため、受講することで図書館リテラシーの復習やスキルアップの機会となる学生は限られている（表3）。

表2 経済学部、経営学部ゼミナール大会概要（2011年度）

| | 経済学部 | 経営学部 |
|----------|--|--|
| 目標・目的 | ・日頃の研究成果の発表の場として、自分の考え方の視野を広げ、学科・学年の枠を超えた研究交流を行う。3回生においては、学部での学びの集大成の場とする。 | ・論文としての質的な充実をはかり、学問的な内容で競い合うことを目標とする。 ・学術論文を書くためのきっかけ、学問を尊ぶ文化を作り上げる。学生間の相互評価・自己評価につなげる。 |
| 身につけるべき力 | 問題発見能力、問題解決能力、調査能力、分析能力、説得力のある主張を行うプレゼン力等 | 問題発見能力、問題分析能力、調査能力、論理的思考力、説得力のある主張を行うプレゼン力等 |
| 参加状況 | ・50分科会、227チーム（学部生の約1/4が参加） 内訳は、1回生72チーム、2回生34チーム、3回生108チーム、4回生13チーム | ・1回生大会は32分科会、159チーム（基礎演習のほぼ全クラスが参加） ・上回生大会は24分科会、117チームが参加。 |
| 備考 | ・回生による大会の区別なし。 ・個人での参加可能。 | ・1回生と上回生に分かれて実施。 ・個人での参加不可、必ずグループで参加。 |

※ 2011年度ゼミナール大会概要および各学部ホームページから筆者作成

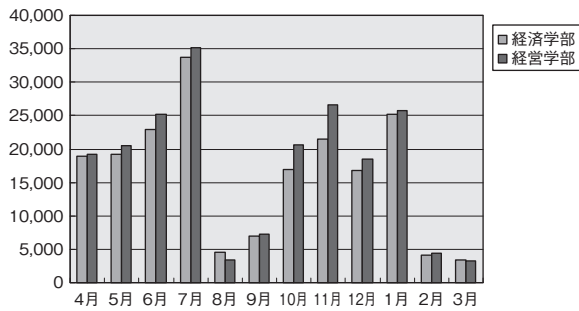


図1 2011年度メディアライブラリー入館者数

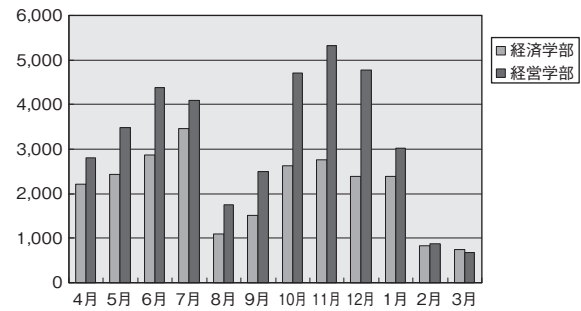


図2 2011年度経済学部・経営学部貸出冊数

表3 経済学部、経営学部で実施している図書館リテラシー一覧（2012年度）

| 対象 | リテラシー名 | 学部 | 実施講義 | 講師 | 実施時期 |
|------|-----------------------|---------|--------|---------|---------|
| 1回生 | 図書館リテラシー | 経済・（経営） | 情報処理演習 | 担当教員 | 4～5月 |
| 1回生 | 図書館ツアー | 経済・経営 | サブゼミ | オリター | 4～6月 |
| 1回生 | 図書館資料の検索・現物確保実習 | 経営 | サブゼミ | オリター・LS | 5～6月 |
| 1回生 | ゼミナール大会向けクラス対象出張ガイダンス | 経済・経営 | 基礎演習 | 図書館職員 | 7・9～10月 |
| 2回生～ | クラス対象出張ガイダンス | 全学部 | 正課授業 | 図書館職員 | 随時 |

※図書館リテラシー（経営）は必修ではない。LSは学生ライブラリースタッフの略。

5. 研究の背景まとめ

大学図書館が求められている新たな取り組みや機能に対して、本学図書館では「ぴあら」を開設し、複数の部課のスタッフによる学習支援の提供を始めた。しかし、社会に要請されている人材を育成するためには、より主体的な学習時間の増加と学びの質向上が必要であり、学びの質向上は信頼性の高い学術情報を使うこととは切り離せない関係にある。教学を支える図書館として、学生が調査・研究に際して信頼性の高い学術情報を利用し、論文やプレゼンテーション等の発信力を強化する支援に取り組む必要がある。

BKC社会科学系学部である経済学部、経営学部においては、ゼミナール大会は学びの基礎力を鍛え定着する機会や、学びの成果を確認する機会であり、参加学生は自らテーマを考え、主体的に調査・研究に取り組まなくてはならないことから授業時間外の学びの動機づけとなっている。ゼミナール大会準備期間は、学生の図書館利用が活発化し、学術情報を活用することから図書館リテラシーの知識の定着やスキルアップの機会であり、ゼミナール大会に関わり集中的に学習支援を行うことは、授業外学習の質向上への取り組みを多くの学生に対して行える利点がある。図書館におけるゼミナール大会に関する支援は、リテラシーに関わる既存のサービスの範囲内の部分的なものに留まっているが、学習時間を増やし

学びの質の向上をはかるためには、図書館は従来の全学部を対象とする学習支援に加え、より多くの社会科学系学部学生を巻き込む新たな学習支援に取り組むことが必要である。

II. 研究の目的

本研究の目的は、他の学問分野に比べ全国的に学習時間が少ない社会科学系学部学生に対し学びの質向上を進めるため、図書館における新たな学習支援策を開発することである。

そこで、新たな学習支援策として、経済学部、経営学部を主な対象とするBKCメディアライブラリーにおけるゼミナール大会学習支援プログラムを提起する。支援プログラムでは、図書館の空間や既存の学習支援と準備や成果物の質向上につながる新たな学習支援の内容や形態、「立命館らしさ」であるピア・ラーニングを活かし、学内の学生スタッフ、各学部学会の学生委員会のスタッフによる連携なども視野に入れて検討する。

他大学においてもゼミナール大会と同様な形態をもつイベントが開催されているが、図書館がそれらのイベントに特化した支援を実施している事例はほとんど見られない。この新たな学習支援プログラムは、社会科学系学部学生の学びの質向上に図書館として寄与すると同時

に、科学技術・学術審議会答申で期待されている学習支援及び教育活動へ直接関与する新しいタイプの図書館と図書館職員像創造への確かな一歩となるものをめざす。

Ⅲ. 研究方法と調査内容

本学学生のゼミナール大会における学術情報利用や図書館利用との関連について、実態を明らかにするとともに、他大学図書館の学習支援を参考にするため下記の調査を行った。

- ①他大学図書館における学習支援調査
- ②ゼミナール大会と図書館利用に関する学生アンケート調査
- ③2011年度ゼミナール大会提出論文の学術情報引用調査
- ④ゼミナール大会に関するヒアリング調査

Ⅳ. 調査・分析

1. 他大学図書館における学習支援調査

ヒアリングおよび図書館ホームページによる調査の結果、他大学図書館では図書館内のラーニングコモンズに多様な学習支援を展開し始めていることがわかった。特徴としては、1つのフロアに情報収集や論文執筆に関わる複数の学習支援を集中的に配置し、利用者の利便性と学習支援の連携に工夫をしていることがあげられる（表4）。

電子コンテンツを利用した学習支援は、千葉大学では授業に関する資料を中心に検討され、慶應義塾大学では和書を中心とした電子図書普及と利用者の利便性の高い電子図書ビジネスモデル開発の調査がされているが、課題が多く本格的な活用の段階に至っていない。

調査をした他大学のうち、特色ある学習支援を行っている千葉大学と慶應義塾大学のヒアリング調査の結果について、概略を以下に記述する。

(1) 千葉大学附属図書館、アカデミック・リンク・センター（2012年6月18日訪問）

①学習支援のコンセプト

同大学では、2012年4月に「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ「考える学生」を育成するため、附属図書館や普遍教育センターなどが協力し、アカデミック・リンク・センターを立ち上げた。アカデミック・リンク・センター所属の教員と図書館職員が協働し、授業資料の電子パッケージ化等の授業支援や図書館内のアクティブ・ラーニング・スペースでの学習支援などのアクティブ・ラーニング推進と研究開発を行っている。学習支援は、新しい学習環境（空間とコンテンツと人的支援の連携）を通じ、学生の「気づき」へとつなげることをコンセプトとしている。

②学習支援内容と体制

学習支援は、学生相談等のオフィスアワー（教員）、数学・化学・物理・文系レポート作成の学習相談（院生）、学術情報検索のレファレンスデスク（職員）がある。支援のコンテンツとして、普遍教育（一般教養）のコア科目の授業と連携した参考文献リスト「授業資料ナビゲーター」がある。今後は、授業の録画資料やデジタル化した教材などが提供される予定であり、学習支援のコンテンツの充実に向けて取り組まれている。

表4 各大学図書館内での学習支援状況

| | 千葉大学 | 慶應義塾大学 (湘南・藤澤キャンパス) | 名古屋大学 | 立命館アジア太平洋大学 |
|-----------------|--|---|---|---|
| 学習支援 (内容・体制) | ・オフィスアワー（教員） ・レファレンス（職員） ・学修相談 [ライティング・化学・物理・数学]（院生） | ・AV 機器支援（学生） ・情報基盤関係支援（学生） ・データベース利用支援（学生） ・ライティング&リサーチ支援（院生・ポスドク） | ・IT 支援（院性） ・情報検索支援（院生） ・学習相談（院生） ・ライティング支援（院生） | ・学修相談（教員） ・ライティング支援（教員・院生） ・リメディアル教育支援（学生）※公文式を利用 |
| 授業支援 | ・テクニカル支援（学生・院生） | なし | なし | なし |
| その他 | ・セミナー、リテラシー補助等（学生） | | ・留学生サポートデスク | |

※名古屋大学の状況は、同大学図書館ホームページの情報に基づく。

（2）慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター（2012年6月19日訪問）

①学習支援のコンセプト

同大学では、各キャンパス図書館において、学問分野や利用者によってサービスが展開されており、開館時間、貸出条件、貸出できる資料種別が異なっている。湘南藤沢キャンパスは、社会科学系学部と理系学部があり、デジタル化に対して最も意識が進んでおり、1990年のキャンパス開設から、学生の協力のもと支援や取り組みを進めていく文化が醸成され、図書館での学習支援も学生・院生によるものが多いことが特徴的であった。

②学習支援の内容と体制

学習支援は、AV機器を取り扱うAVコンサルタント、学内情報基盤全般や情報機器の窓口のCNSコンサルタント、データベースについて説明するデータベースコンサルタント、ライティング&リサーチコンサルタント、職員によるレファレンスデスクがある。

ライティング&リサーチコンサルタントは、当初ライティング支援だけだったが、その中でリサーチの手法などをアドバイスすることが多く、名称を変更した。スタッフは、書く技術を持っていることを重視し、博士後期課程の院生やポスドクが教員からの推薦に基づき選ばれている。スタッフの語学能力に応じ、英語や中国語での対応も可能である。

2. ゼミナール大会と図書館利用に関する学生アンケート調査

ゼミナール大会と図書館利用に関する学生アンケートは、経済学部19クラス、経営学部22クラスの協力を得て、7月10日から7月19日にアンケート調査票を配布、

回収した。配布枚数963枚に対し、回収枚数は702枚で回収率は72.9%であった（表5、表6）。

（1）ゼミナール大会と授業外学習や図書館利用

ゼミナール大会に関わる調査・研究活動が、授業外学習時間や図書館利用といった学びの量や質にどのような影響を与えているのかについて分析した。授業外学習は、授業に関わる課題や予習復習のほか、テキストや配布資料、学術書、教養書などで必要な知識や技術を身につけることを含んでいる。経営学部では、原則1回生が全員参加となっているため、参加経験の有無のバランスがとれている経済学部の2、3回生の結果を用いた。

経済学部2、3回生の1日あたりの授業外学習は、約8割が1時間未満であり、1時間未満を0.5時間、1～3時間未満を2時間、3時間以上を3時間として平均時間を算出すると、ゼミナール大会の参加経験がある学生は0.98時間、参加経験がない学生は0.83時間で、いずれも1時間未満であり差はみられない。しかし、通常1日あたりの授業外学習時間が1時間未満の学生に注目すると、ゼミナール大会準備時は、49.2%の学生が1回あたりの授業外時間が1時間以上に増加しており、平均時間は1.34時間と増えている。これらから、ゼミナール大会は調査・研究の動機づけとなっており、授業外学習時間を一時的に増加させるが、参加経験の有無と通常の授業外学習時間には相関関係が低いことがわかった（図3）。

表5 アンケート回収枚数・有効枚数

| | 配布枚数 | 回収枚数 | 有効枚数 | 有効枚数内訳 | | | | |
|------|------|------|------|--------|-----|-----|-----|-----|
| | | | | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | 5回生 |
| 経済学部 | 438 | 285 | 282 | 106 | 93 | 83 | 0 | 0 |
| 経営学部 | 525 | 417 | 412 | 121 | 125 | 138 | 24 | 4 |

表6 アンケート回答者属性内訳

| | ゼミナール大会参加経験あり | | | | | | ゼミナール大会参加経験なし | | | | | | | |
|------|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---------|
| | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | 5回生 | 小計 | 内 今年も参加 | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 | 5回生 | 小計 | 内 今年初参加 |
| 経済学部 | 4 | 37 | 58 | 0 | 0 | 99 | 47 | 102 | 56 | 25 | 0 | 0 | 183 | 83 |
| 経営学部 | 1 | 117 | 128 | 20 | 0 | 266 | 81 | 120 | 8 | 10 | 4 | 4 | 146 | 81 |

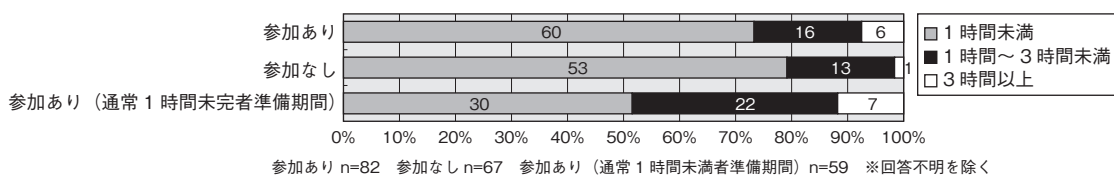


図3 1日の授業外学習時間とゼミナール大会準備時の1回あたりの準備時間（経済学部2、3回生）

図書館の来館目的で参加経験の有無によって違いがみられたのは、複数で学習すると回答した項目で、参加なしの学生が約10%とやや多かったが、その他の利用傾向や利用頻度について明確な差はみられない（図4）。

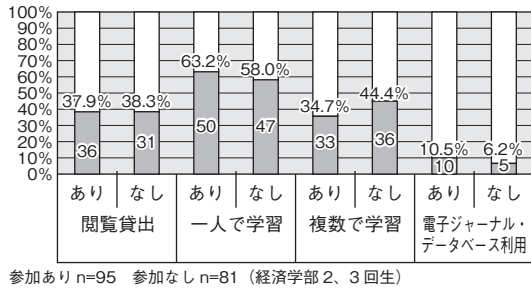


図4 図書館利用目的

授業時間外で利用したことのある学術情報ツールについて、ゼミナール参加経験の有無とレポート課題やシラバス参考図書などの検索で日常的に利用する学内所蔵検索では差がみられない（図5）。しかし、新聞記事検索や論文記事検索の利用では、参加経験の有無に差がみられることから、ゼミナール大会の準備において利用する機会となっている可能性があるが、利用経験と回生間について差がみられないため、ゼミナール大会も含めた4年間の学びの積み重ねと学術情報ツールの利用の関係性は低いと考えられる。

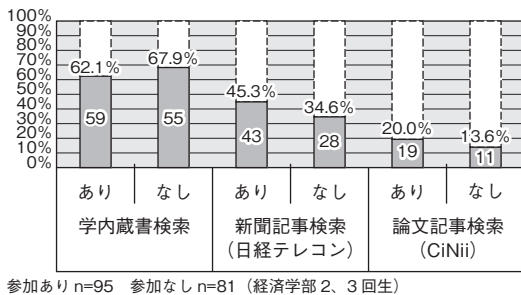


図5 授業外で利用したことがある情報ツール

(2) ゼミナール大会における調査・研究状況

ゼミナール大会の調査・研究では、参考文献や統計データなどを集める必要があり、これらの情報の質が論文の質に影響する。両学部の参加経験がある学生のうち54.8%は、インターネット検索エンジンを主に情報収集に使っており、インターネット上の情報として、論文は35.6%、企業の情報や統計データは51.2%、統計は35.1%の学生が実際に利用したと回答している。特に論

文は、図書館資料（紙媒体）や、データベースやインターネット上で公開されている電子資料など多様な形態や入手方法があるが、図書館資料（紙媒体）から入手したと回答した学生が19.2%に比し、インターネット上から入手したと回答した学生が35.6%とインターネット情報の方が多（図6、図7）。

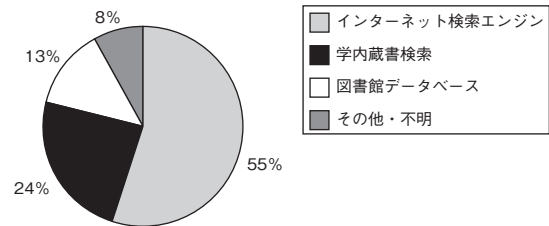


図6 ゼミナール大会で主に使う情報検索ツール

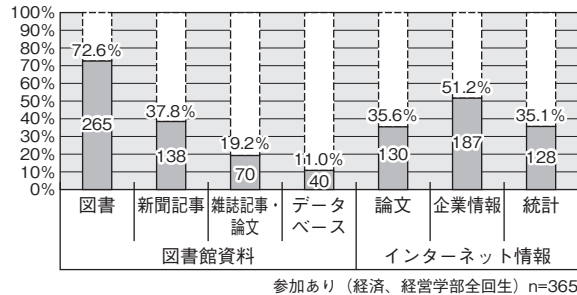


図7 ゼミナール大会で実際に利用した資料(複数回答可)

情報収集の主なツールを選択した理由としては、情報ツールへのアクセスの良さや手軽さ、十分に調べることができるといった理由の割合が多く、情報の信頼性の高さはあまり重視されていないことがわかった（図8）。

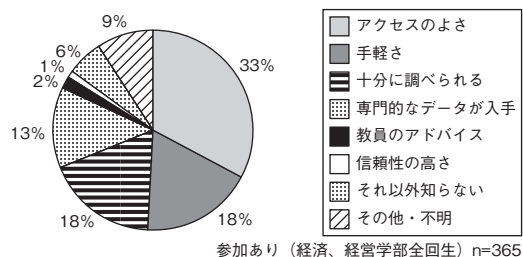


図8 主に使う情報検索ツール(図6)を選んだ理由

しかし、実際に論文に利用した資料をみると、主に情報収集するツールとして学内蔵書検索は24%しか選択されていないが、図書館資料(図書)は72.6%の学生が利用しており、新聞記事なども一定利用されている。これらのことから、学生は情報収集のアプローチとして

使い慣れたインターネット検索エンジンを使う傾向にあり、インターネット検索エンジンでヒットした情報を主に論文に取り込みながら、図書館資料（図書）なども利用して論文を書いていることがわかった。情報の信頼性については、1回生図書館リテラシーなどで説明を行っているが、学生は信頼性ではなく身近で使い勝手の良いツールを主に使う傾向にあるといえる。

ゼミナール大会の準備をした主な機会は、両学部の参加経験がある学生によると、正課授業やサブゼミが50.1%、授業外時間45.5%とほぼ半々の割合となっており、学部や回生による差はみられない（図9）。授業外時間に多くの学生がゼミナール大会の準備をしている実態は、ゼミナール大会の準備時期に参加者の授業外学習時間が一時的に増加することの裏付けとなっている。

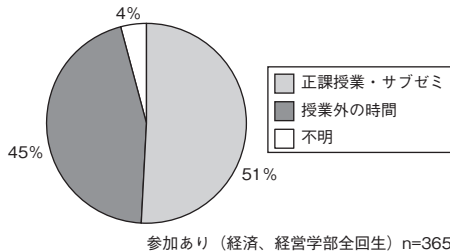


図9 主に準備した機会

主に準備する場所として51.5%の学生が教室を選択した理由として、51%の学生が主に準備した時間について正課授業とサブゼミと回答したと結びついていると考えられ、授業外の準備時間は主に図書館で準備されていることがわかる。図書館内でグループの作業が可能な場所で準備したと回答した学生は参加者の62.5%である。21.1%の学生が回答したセントラルアークは、自由に議論することができるグループ作業のしやすさから利用されたと考えられる（図10）。しかし、同様にグループ作業ができる空間であるが、自宅等の学外と回答した割合が低いことから、学生は学内に滞在している間に準備をする傾向にある可能性があり、図書館内の「びあら」開設により、今後図書館内で準備する学生がさらに増えると推測される。

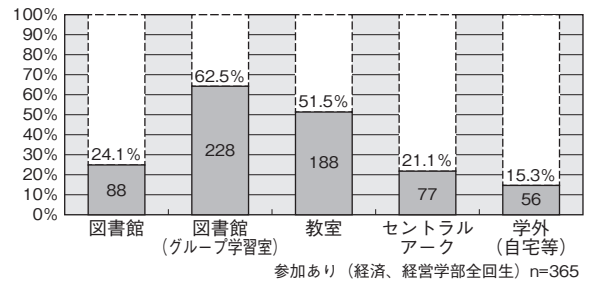


図10 主に準備した場所（複数回答可）

(3) ゼミナール大会の支援ニーズ

ゼミナール大会に関わる支援のニーズとして、学生が最も必要としている内容は、学術情報収集方法が最も多く、経済学部生37.4%、経営学部生30.3%となっている（図11）。

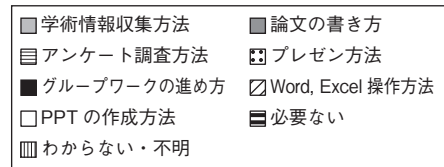
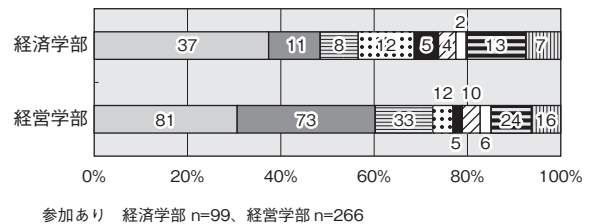


図11 最も支援を必要としている内容

経済学部生は、学術情報収集方法の次に支援してほしい内容として、プレゼンテーション方法が12.1%、論文の書き方が11.1%と続き、プレゼンテーション方法の支援のニーズが経営学部生の4.5%に比べ多いことがわかる。経済学部生のプレゼンテーション支援のニーズの高さについて、経済学部教員にヒアリングしたところ、基礎演習やゼミにおいてプレゼンテーション形式で発表する機会が経営学部よりも少ないことが考えられるとのことであった。

経営学部生は、論文の書き方に対するニーズが29.7%と経済学部生の11.1%に比して多く、アンケート調査方法に対するニーズが12.4%となっている。経営学部教員にヒアリングしたところ、学術情報収集方法と論文の書き方のニーズが高い背景として、読む力や書く力が不足している学生にとって、経済学部と異なりほぼ全員

が参加する1回生ゼミナール大会で情報を収集し論文を書くことに困難さを感じていることのと表れであるとの意見が出された。また、アンケート調査方法のニーズは、学問分野の違いやよく利用する調査手法の差から生じているとのことであった。

支援を受けたい機会は、両学部あわせて約30%の学生が正課授業・サブゼミを選択しており、支援を受けたい相手として教員が両学部あわせて54%を占めていることと対応している。主に準備した機会と同様、支援を受けたい機会も正課授業・サブゼミと授業外である空き時間とにほぼ半々に分かれており、主に準備する時間に支援を受けたいという傾向が読み取れる（図12）。

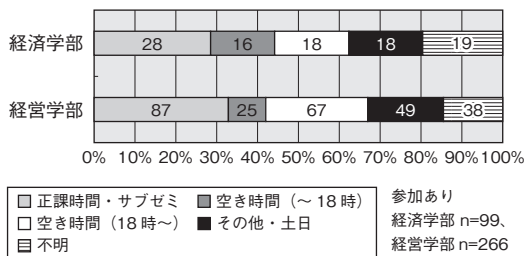


図12 支援を受けたい機会

支援を受けたい相手として、教員が一番多いことは両学部で共通しているが、その後は、経済学部生はTAが11.1%、経営学部は図書館員が10.9%やオリターが7.9%とつづき、学部間での差がみられる（図13）。

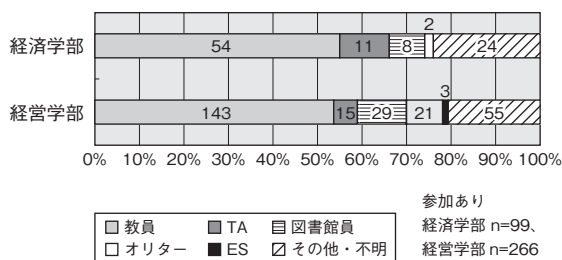


図13 支援を受けたい相手

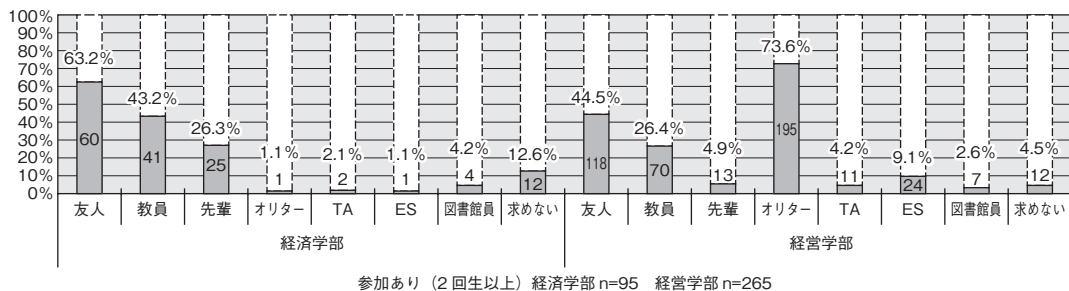


図14 学習や調査・研究に関し困った時にアドバイスを求める相手 (2回生以上・複数回答可)

経済学部生は、通常の学習や調査・研究に関してアドバイスを求める相手として教員との回答が43.2%に対し、友人が63.2%、先輩が26.3%と身近な存在にアドバイスを求めている傾向があるが、ゼミナール大会に関わる支援としては、教員やTAからの支援を想定されていると考えられる。

経営学部生は、通常の学習や調査・研究に関してアドバイスを求める相手として、オリターを73.6%の学生が選択しており、その背景として基礎演習終了後もオリターとのつながりをもつ学生が多いことと表れと考えられる。そのため、経済学部生に比し7.9%の学生がゼミナール大会で支援を受けたい相手としてオリターを選択している。経営学部教員によれば、サブゼミでオリターが論文の書き方などのアドバイスをしている実態があることから、正課時間やサブゼミでの支援ニーズと関係している可能性もある。また、経営学部生が経済学部生よりも図書館員を多く選択した理由として、クラス対象出張ガイダンスの開催回数が経済学部よりも経営学部の方が多く、図書館員との接点が多いことや、主な準備場所である図書館のスタッフとしての利便性の側面が考えられる（図14）。

(4) ゼミナール大会の準備頻度と満足度

ゼミナール大会の準備頻度と満足度の関連性について、参加経験の有無のバランスがとれている経済学部生のアンケートによると、準備頻度に関わらず満足度が「やや不満+不満」と回答した割合はほとんど差が見られない。しかし、「大変満足+まあまあ満足」と回答した割合は、準備頻度が多いほど高くなっていることから、準備頻度が多く、より主体的に準備を進めた学生ほど高い満足度を感じていると考えられる（図15）。

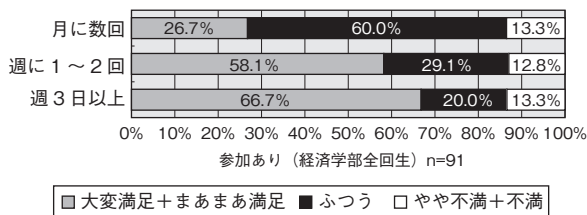


図15 ゼミナール大会の準備頻度と満足度

3. 2011年度ゼミナール大会提出論文の学術情報引用調査

ゼミナール大会論文における学術情報利用状況や図書館リテラシーとの関連性について、論文の引用資料および参考文献リスト掲載資料の出典について調査した。PDFファイルで論文が保管されており、調査に関わる簡便さから2011年度経営学部の論文を用いた。

調査の結果、1論文あたりに引用された資料数は、回生に関わらず優秀賞受賞班の方がそれ以外の班よりも多いことがわかった。回生別にみると、優秀賞受賞の有無に関わらず、1回生よりも上回生の方が平均して1論文あたりの引用資料数が多く、調査・研究においてより多くの情報を収集していると考えられるが、インターネット上の情報とそれ以外の情報の利用比率の差はほとんどみられなかった。

引用されたインターネット上の情報の内訳は、企業の公式ホームページからの企業情報が一番多く、次に政府・地方公共団体・協会などの公式ホームページに掲載された統計データなどが利用されている。統計データは、図書館内の白書統計やデータベースから入手することができるが、企業のホームページや政府などの公式サイト、リサーチ会社の調査データなどからの引用が多く、主にインターネットを通じて入手していることがわかった（表7）。

さらに調査の過程で、引用されているインターネット上の情報を確認したところ、出典情報が曖昧な引用や、一次資料を確認せずにリサーチ会社の資料紹介ページをそのままコピー&ペーストし孫引きをしている例もみられた。引用している情報の中には、インターネットの記事や個人ホームページなど、信頼性が低く学術情報として論文に引用するには不適切な情報も含まれていた。これらの例は、情報の特徴や信頼性を理解して資料を利用しているのではなく、インターネット検索エンジンを利用してキーワードにヒットした情報をそのまま引用していることが原因と考えられる。図書館リテラシーや基礎演習テキストなどを通じ、情報の信頼性や見極め方、適切な引用について学生が知る機会が何度かあるが、学生に十分に理解されておらず、知識が定着していないと考えられる。

4. ゼミナール大会に関するヒアリング調査

(1) 教員

基礎演習担当者やゼミナール大会担当者、学部執行部教員を中心に、経済学部、経営学部各12名の計24名に対し、7月中旬から下旬にかけてヒアリングを行った。

① 学生に現在不足している力やゼミや基礎演習での指導状況

両学部の教員より、学生は、テーマに対し問いを立て、論文の全体の構成を考える力が弱いため、問いを立てるところで躓き文献やデータ収集に進まない状況にあることが多い点があげられた。また、文献やデータの情報収集もインターネット情報に頼りがちであり、インターネット情報では探すことができない情報があることを知らず、信頼性の高い情報を活用する意識が低い学生が多い、レポートや論文を書く際に、自己の意見や分析が少なくインターネット情報を切り貼りしていることが多い

表7 2011年度経営学部ゼミナール大会提出論文における1件当たりの引用件数（平均値）

| 回生 | 結果 | サンプル数 | 引用・参考文献 | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-------|---------|-----|------|-----|------|------|-------------|----------|-------|-------|--------|----------|-------|-----|-----|
| | | | 資料総数 | 図書 | 白書統計 | 雑誌 | 新聞記事 | 雑誌論文 | インターネット上の情報 | | | | | | 本学D.B | その他 | |
| | | | | | | | | | 企業HP | 政府・県協会HP | ネット辞書 | ネット記事 | リサーチ会社 | ブログ・個人HP | | | 小計 |
| 1回生 | 優秀賞 | 26 | 10.7 | 4.6 | 0.2 | 1.0 | 0.4 | 0.3 | 1.6 | 1.0 | 0.2 | 0.5 | 0.4 | 0.3 | 4.0 | 0.1 | 0.3 |
| | | 69 | 9.7 | 3.3 | 0.1 | 0.3 | 0.9 | 0.1 | 1.9 | 1.1 | 0.2 | 0.7 | 0.5 | 0.5 | 4.8 | 0.2 | 0.1 |
| 上回生 | 優秀賞 | 10 | 18.8 | 6.4 | 0.3 | 1.1 | 2.2 | 1.4 | 2.9 | 1.7 | 0.5 | 0.9 | 0.4 | 0.2 | 6.6 | 0.2 | 0.3 |
| | | 16 | 13.6 | 3.9 | 0.3 | 0.6 | 1.1 | 1.1 | 1.7 | 1.7 | 0.1 | 1.4 | 0.6 | 1.1 | 6.6 | 0.2 | 0.2 |

※その他は、テレビ番組、企業関係者からのヒアリング等である。

※本学D.B.とは本学契約のデータベースであり、新聞記事や雑誌記事を検索できるデータベースなど。

ことが問題となっているとのことである。

経営学部教員からは、書く力や一冊の図書を読み通す力について不足しているとの意見が出されており、1回生基礎演習の見直しなどを含め4年間の学びの積み重ねやPBLなどのアクティブ・ラーニングを活用した取り組みが必要との意見が出されていた。

これらの不足している力に対する取り組みとして、上回生ゼミでは学生に個別指導ができるが、1回生基礎演習ではテーマと教員の専門が異なることや班が多く、十分に指導が行き届いていない場合も多いため、問いを立て情報収集方法を指導することは、ゼミ以外でも様々な場で繰り返し指導する機会や支援があるとよいとの意見があった。

②ゼミナール大会での図書館と連携した支援

ゼミナール大会に関わる支援として、学生がよく選ぶテーマや分野について、参考となる図書や主なデータベースなどをまとめた資料の作成や、プレゼンテーションや情報収集方法、定量的調査や定性的調査、統計情報収集などの講座の開催について意見がだされた。情報収集方法や論文の書き方については個別対応が必要との意見があり、特に情報収集方法は、論文執筆の経験がある博士後期課程院生やポスドク、若手教員による支援が適切であり、図書館職員による情報収集ツールの支援との組み合わせによる効果を期待する声があった。

さらに、ゼミナール大会のコンテンツとして、前年度の優秀論文について著作権処理と剽窃防止に留意しつつ、ゼミナール大会担当教員が講評を付して提供することや、プレゼンテーション映像を参加学生に見せることは、1回生に対し具体的なイメージを示すことが可能となるため、整備し提供することに大いに意義があるとの意見が出された。

(2) 学部事務室担当者および学会学生委員会担当者

ゼミナール大会の運営側として、経済学会学生委員3名に8月3日、経営学会学生委員3名に7月9日、経済学部事務室担当者1名に5月29日、経営学部事務室担当者2名に5月29日にゼミナール大会の課題やニーズについてヒアリングを実施した。

①ゼミナール大会の課題

両学部では、上回生の参加者が減少し、参加するゼミも偏りがちである点について課題となっており、ゼミナール大会の質そのものや論文やプレゼンテーションの質の問題は議論されていない。学会学生委員は、学生のプレゼンテーションの発表方法やモチベーションの個人差など気になる点があるが、具体的に検討していないとのことであった。

②ゼミナール大会に関わるニーズ

経済学部事務室担当者より、プレゼンテーションの練習場所や撮影機材のニーズがあげられた。学会学生委員より、ゼミナール大会に限定した情報収集や論文の書き方に関わるコンテンツや、テーマに関連した基本的な資料の紹介や情報収集支援の冊子の要望が出された。また、ゼミナール大会の前年度優秀論文やプレゼンテーション映像の提供について、コンテンツ収集の協力が可能であるが、事前の著作権処理や閲覧提供後の剽窃防止についての検討が必要との指摘があった。

5. 調査・分析まとめ

ゼミナール大会は、それまでの学びの集大成であると同時に、その後の学びの展開へつなげる仕掛けでもあるが、学生アンケートの結果より、参加経験の有無が自主的な学習の差になっておらず、必ずしも主体的な学びのスタイルが身につけていないことがわかった。

ゼミナール大会で身につけるべき力として、両学部では問題発見能力、問題解決能力、調査能力などが掲げられているが、教員ヒアリングではテーマから問題を発見し、問いを立てる問題発見能力が学生に不足しているとの意見が出された。学生アンケートや教員ヒアリングより、学生はテーマに関わる情報の多くを手軽さやアクセスのよさからインターネット検索エンジンで調べて引用しており、ゼミナール大会論文引用情報調査より、情報の見極め方や適切な情報収集および利用といった調査能力に関わる力量が十分についてはいない状況であることがわかった。

ゼミナール大会に関わる支援について、学生アンケートより、情報収集方法や論文の書き方、アンケート調査、プレゼンテーション方法などのニーズが出されており、教員ヒアリングでは、学生が実際に準備を行っている場で図書館と教員などが連携した支援をすることが効果的との意見が出された。各学会学生委員や学部事務室担当

者ヒアリングより、ゼミナール大会の課題として、論文やプレゼンテーションといったゼミナール大会の質に関わる議論はされていないことがわかった。ゼミや基礎演習といった正課授業では、教員が個々に論文やプレゼンテーションの質の向上について取り組んでいるが、ゼミナール大会に関わる授業外学習に対する支援は、図書館のレファレンスサービスなどに留まっており、学生のニーズやゼミナール大会で身につけるべき力の支援として不十分である。

多くの学生が集中して学習する機会であるゼミナール大会を通じて、学びのスタイルや身につけるべき力を定着させるためには、ゼミナール大会の目的にそった学習支援が正課外において必要である。ラーニングコモンズ「びあら」の開設により、学生がゼミナール大会の準備を授業外で最もよく行う図書館において、授業外学習に関わる支援の提供が空間的に可能となった。ゼミナール大会の支援として個々で行っていた支援や学生の支援ニーズを学びのプロセスの流れに位置づけまとめることで、適切な支援を適切なタイミングで学生に提供することができ、学生の学びの質向上につながると考えられる。

V. 政策立案

1. BKCメディアライブラリー・ゼミナール大会支援プログラム

(1) ゼミナール大会支援プログラムのフレームワーク

継続的な授業外学習の第一歩であり、ゼミナール大会で身につけるべき力をつけるための授業外学習の支援として、メディアライブラリー・ゼミナール大会支援プログラムを提起する。支援プログラムは、主催者である各学部の学会（教員・学生委員）と図書館で企画・実施する学習支援と、ゼミナール大会に関わるコンテンツ充実に向けた整備や機材・環境整備の2つを軸とする。

ゼミナール大会支援プログラムは、学部と図書館によるゼミナール大会に特化した新たな学習支援であり、これまで個々に実施していた支援や学生のニーズが多い支援について、ゼミナール大会の流れに沿ってプログラム化し、適切な時期に提供することで、支援同士のつながりを強固にし、明確なナビゲートの道筋を作ることが期待できる（図16）。

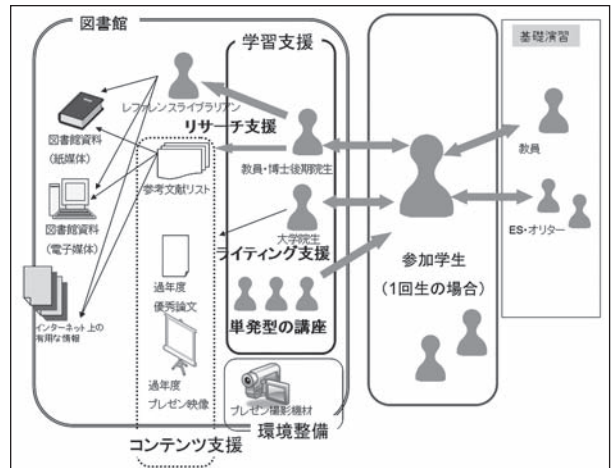


図16 ゼミナール大会支援プログラムの構成図

また、正課授業で得た知識や基礎演習やゼミで習得した調査・研究の手法を用いて、学生が個々の具体的なテーマで作業に取り組む場において、学生に必要な支援を提供することは、学生の学びの気づきによる学びの質の向上の効果が考えられる。

ゼミナール大会支援プログラムについて、以下詳述する。

(2) 学会と図書館で企画・実施する学習支援

学生がゼミナール大会を通じて身につけるべき力に対する総合的な支援として、学会と図書館で企画・実施し、豊富化する。学会と図書館で企画・実施する学習支援は、学生が持ち込んだ質問や相談に対して講師が対応する相談型の学習支援と講師が参加学生にレクチャーする講座型を組み合わせる（図17）。

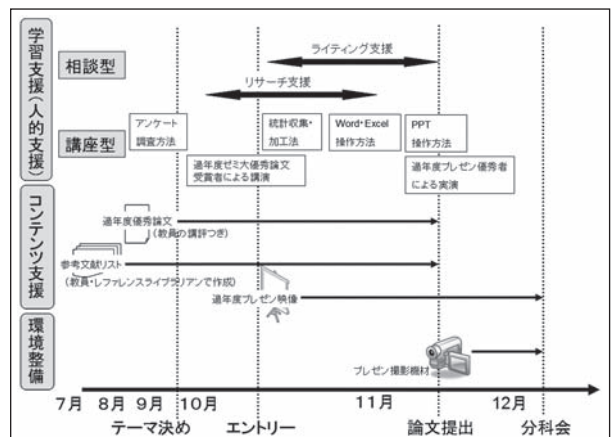


図17 ゼミナール大会支援プログラムの内容と提供時期

①相談型の学習支援

個別相談型の支援は、ゼミナール大会に参加する学生の多くを対象として、学生アンケートからニーズが高

かったライティング支援とリサーチ支援を実施する。

ライティング支援は、現在図書館びあらで提供されている支援では回数が少ないため、継続的に学生が相談できるように10月中旬より11月中～下旬の論文提出まで回数と支援体制を強化することが必要である。

リサーチ支援は、テーマから問題を発見し情報収集の方向性を立てるまでの問題発見能力に対する教員や博士課程後期課程院生による支援と、具体的な情報収集のツールの紹介や操作方法といった調査能力のスキルに関わるレファレンスライブラリアンによる支援を連携させ、10月中旬から11月上旬ごろまで実施する。この2つの支援を図書館内で連携させることは、学生の調査・研究活動の最初の躓きに対する支援として有効であると考えられ、調査・研究をまとめ分析し、論文を書くための時間を担保することも期待される。

②講座型の学習支援

講座型の支援は、学生アンケートからニーズが見込まれるものをテーマ別に実施する。プログラムとしては、教員による学びの方法論の支援としてアンケート調査方法や統計データのとり方や加工方法、レインボースタッフによるWord、Excel等の操作方法といったスキルに関する実習形式の講座などが考えられる。また、学部学会担当教員の推薦したゼミナール大会過年度優秀賞受賞者による論文作成準備についての講演や、優秀なプレゼンテーションの実演などを企画する。開催時期は、主な対象である1回生の準備を視野にいれ、後期開講直後からを想定する。

③期待される効果

これらの学習支援で期待される効果として、学部学会と図書館が連携することで、学生はより適切な講師から必要な支援を受けることができるようになる。例えば、これまで図書館レファレンスライブラリアンには、学生から問題の立て方や情報収集へのアプローチ戦略といった学びのプロセスや方法論に関する相談も寄せられていたが、これらの質問に対し院生や教員による支援をおくことで役割分担が明確になり、専門的スキルを生かした情報収集支援を効率的に行うことが可能となる。

さらに、支援プログラムを複数準備することで、学生はそれぞれの進捗状況や必要な支援を選択できる。また、図書館内「びあら」にて学習支援が実施されることで、学生は知ったことや気づきに対し、すぐに図書館内で調査や議論に入ることができるという場の利点がある。

(3) ゼミナール大会に関わるコンテンツ支援

ゼミナール大会に関わるコンテンツ支援として、ゼミナール大会分科会優秀論文とプレゼンテーション映像、参考文献リストの整備と提供、プレゼンテーション撮影機材の配置を行う。

①ゼミナール大会分科会優秀論文とプレゼンテーション映像の提供

ゼミナール大会分科会優秀論文とプレゼンテーション映像は、各学会と学会学生委員会の協力のもと整備し、図書館で管理、提供を行う。

優秀論文は、ライティング支援とともに論文のまとめ方や書き方の参考となるように整備する。提供にあたっては、図書館内や特設ページで公開することを想定し、剽窃を防ぐため参考となる部分のみを紹介し、ゼミナール大会担当教員の講評つきで提供する等の工夫をする。

プレゼンテーション映像は、プレゼンテーション支援でもあり、図書館「びあら」内のプレゼンテーションルームで定期的上映するなど、ゼミナール大会に参加しない学生に対しても見える工夫を行うことで、他学部の学びにふれる機会や学びの刺激となるようにする。

②参考文献リストの作成と提供

教員ヒアリングや学会学生委員から出された意見を活かし、教員と協力して、よく取り上げられるテーマや分野に関する入門書や白書・統計類等の参考文献リストを作成する。参考文献リストの資料は図書館で配置し、図書館資料の充実につなげる一方、リサーチ支援で紹介することで、参加学生が信頼性の高い情報にふれるきっかけにつなげる。

③プレゼンテーション撮影機材の整備

学生アンケートや学部事務室担当者ヒアリングより、経済学部生にはプレゼンテーション支援のニーズが一定あることがわかったが、プレゼンテーションを実際に教員や院生に見てもらいアドバイスする支援は体制が難しいため、環境整備としてプレゼンテーション機材を整備することで代替する。具体的には、撮影機材を図書館「びあら」内で貸出し、「びあら」内のプレゼンテーションスペース等で自身のプレゼンテーションを撮影し、確認することで自身のプレゼンテーションの振り返りを通じた気づきができるようにする。

④期待される効果

ゼミナール大会に関わるコンテンツ支援では、学生に視覚的に成果物を示すことで、具体的な目標やすべき内

容が明らかになる。特に、初めて参加する1回生にとっては、具体的な成果物を見る機会を提供することで、参加に対する動機づけやモチベーション向上、図書館内でのゼミナール大会に向けた雰囲気作りが期待できる。

（4）支援体制

ゼミナール大会に関わる支援スタッフは、教員や院生、レファレンスライブラリアンなど、所属が複数の部署にわたることが想定される。そのため、支援スタッフは、ゼミナール大会の目的や目標、身につけるべき力に加え、支援プログラムの位置づけや学習支援同士のつながりについて共通認識をもち、支援を行うことが必要である。

支援プログラムは図書館内「びあら」で実施するため、全体的な調整はBKCびあら運営委員会のもと、図書館がコーディネーターとなり、両学部学会との連携をはかり実施する。

VI. 研究のまとめ

社会科学系学部の学びの質向上の取り組みに関わって、経済学部、経営学部の多くの学生が参加するゼミナール大会に焦点をあて、学生アンケート、ヒアリングを通じて実態を調査した。その結果明らかになった課題に対し、他大学調査による学習支援の事例を参考に、ゼミナール大会で身につけるべき力のうち、問題発見能力と調査能力の基礎を身につけて定着させるための支援プログラムを立案した。新たな支援プログラムを通じ、多くの学生にゼミナール大会で身につけるべき力への適切な支援を提供することで、参加学生の学びの質の向上やゼミナール大会の底上げにつながることを期待される。

しかし、ゼミナール大会支援プログラムは、学生にとって大学の学びに対する気づきや学びの展開へのきっかけにつながる可能性があるが、ゼミナール大会における学習支援のみで学習習慣を定着させることは難しいと考えられる。この支援プログラムは、図書館にとって学部の学びにコミットした新たな学習支援への取り組みの第一歩であり、新たな学習支援を通じて身につけた力を学生に定着させ、学びの質をより向上させていくためには、各学部や関連部署と図書館が連携した学習支援を作り上げ、推進していく取り組みがさらに必要となる。

VII. 残された課題

本研究の残された課題は下記の通りである。

1. 関連する部署との協力体制構築と効果検証方法の検討

支援プログラムを円滑に進めるためには、連携する部署の役割分担を明確にし、協力体制を構築することが必要である。支援プログラムが学生に多く利用され、ゼミナール大会そのものの底上げにつなげるためにも、各部署が役割を十二分に果たすことが不可欠であり、政策実行に関わるコストも含めて両学部学会と具体的な議論が必要である。

また、今回の支援プログラムの効果については、ゼミナール大会分科会アンケートや各学部の学びの実態アンケートの内容とゼミナール大会の論文の引用調査等を組み合わせ、経年的に検証することが望ましいと考えられる。そのため、効果検証方法について理論化しフィードバックする仕組みや、データ分析を行う体制についても検討が必要である。

2. 上回生に対する専門的な学習支援の提供

ゼミナール大会支援プログラムでは、学びのプロセスに必要な最小限の支援を盛り込んだが、上回生向けの学習支援についてはさらに検討が必要である。より学部の専門的な学びに関わる支援の提供場所や支援については、図書館内「びあら」をコアとし、学部に関係する場所に学部独自のラーニングコモンズを配置するマルチプル・ラーニングコモンズ構想の検討が進み、経済学部、経営学部独自のラーニングコモンズを設置する場合、本研究の支援プログラムとの連携を踏まえて検討する必要がある。

3. 継続的な学習の促進に向けた取り組みの検討

ゼミナール大会支援プログラムを通じて知った知識や身につけた力は、その後の継続的学習において、繰り返されることで定着し身につくと考えられ、今回の支援プログラムだけでは不十分である。恒常的な継続的学習のためには、学生の学びの基本となる正課授業に加え、ゼミナール大会などの学術的なイベントの場を多く準備し、継続的学習に学生を追い込み鍛える仕掛けや機会がさらに必要である。教学ガイドラインに基づき、4年間の学生の学びについてカリキュラムや授業の仕組みなど

の議論が各学部で進められており、授業外学習時間の量と質に対する取り組みがはじまりつつある。正課授業とのキャッチアップを中心に、図書館でも継続的学習への支援について今後検討する必要がある。

【注】

- 1) 『大学図書館の整備について一変革する大学にあって求められる大学図書館像―』（科学技術・学術審議会 2010）では、大学図書館に求められる役割と機能として、①学習支援及び教育活動への直接の関与、②研究活動に即した支援と知の生産への貢献、③コレクション構築と適切なナビゲーション、④他機関・地域との連携及び国際対応の4点としている。また、①の具体例として、ラーニングコモンズの整備、ラーニングコモンズの「場」を利用した学習支援体制や教職員と学生との知の交流、情報を探索・分析・評価・発信するスキルを高める情報リテラシー教育や e-Learning の教材作成の関与・整備・提供への貢献などがあげられている。
- 2) 『2008 年 OECD 報告書』のソーザン・マクマラン『アメリカ合衆国の大学図書館：最近のラーニング・コモンズ・モデル』によれば、ラーニングコモンズの構成要素は「図書館機能、情報技術、その他のアカデミックサポートを機能的空間的に統合したもの」であり、①PC コーナー、②サービステスク、③グループ学習スペース、④プレゼンテーション支援センター、⑤FD（Faculty Development）センター、⑥情報処理教室、⑦ライティングセンターなど学習支援センター、⑧ミーティング、セミナーなど文化的イベント向けのスペース、⑨カフェおよびラウンジエリアである。
- 3) 『衣笠キャンパスにおける「学びのコミュニティ」形成に向けて』（人文・社会科学系（衣笠）新展開調査検討委員会 学習図書館分科会、2010 年 3 月）では、学びのサポートする支援体制や空間、学びを深めるための環境がないという問題が顕在化した。『学びのコミュニティを創造する新図書館構想』（図書館将来構想検討委員会、2010 年 12 月）では、全学の学びのコミュニティ形成に向けた具体化として、①ラーニングコモンズで提供する教育支援（学生の主体的な学びを形成するための人的支援、物的支援と教員の教育に関する活動に対する支援）、②本学の強みであるピアサポートの活用を通じたきめ細やかな支援体制の構築、③マルチプル・ラーニングコモンズの展開④人的サポート体制を充実させたワンストップサービスの実施が提起された。
- 4) 2010 年に実施されたこの調査では、「レポートではインターネットや本の内容をそのまま書き写すことはしない」に「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」（1 回生 32.7%、4 回生 35.1%）という結果が報告されており、過半数以上の学生がそのまま書き写しているということが読み取れる。
- 5) 「学びの実態調査」第 1 回調査は 2009 年度後期から 2010 年度前期に実施し、6,557 名の回答があった。

【参考文献】

- 1) 高井響「理工系学部学生の学習支援のための Learning Commons 構築」『大学行政研究』第 5 号、立命館大学行政研究・研修センター、2010 年
- 2) 山内祐平「ラーニングコモンズと学習支援」『情報の科学と技術』61 卷 12 号、2011 年
- 3) 『電子環境下における今後の学術情報システムに向けて』国立大学図書館協会、2012 年

Development of a new learning support program in the university library for students who study social science
—Focusing on the BKC Social Sciences Paper presentation contest (College of Economics, College of Business Administration)—

KURITANI, Izumi (Administrative Staff, Office of Library services)

MOTOMURA, Hiroshi (Senior Researcher, Research center for Higher Education Administration)

TAKEYAMA, Seishi (Vice-chief, University Library)

USUI, Fumiko (Administrative Manager, Office of Library Services)

Keywords

Improved study quality, learning support, University library, paper presentation contest, studying outside classes

Summary

University libraries are required to take on a new role in order to raise the quality of studies.

Improving in the quality of studies is closely bound up with access to reliable academic information. This necessity makes a new learning support program for the paper presentation contest in the College of Economics and the College of Business Administration. The paper presentation contest is a major event allowing students in both colleges to demonstrate their academic achievements and gives students incentive to study outside classes. The contest also creates opportunities for the university library to support many students.

From the results of interviews with academic staff and surveys of students and learning support at other universities, I found that a learning support program was drawn up to assist in the acquisition of skills necessary for the paper presentation contest such as problem finding and research capability. This program is a new approach to learning support in libraries committed to studies in the colleges and will lead to the creation of a new model of library and library staff.